

アタッチメント 測定手法としての投影法の意義・成果・課題

北 川 恵

(平成17年9月30日 提出)

本稿では、まずアタッチメントと表象モデルについての基本的考え方を整理し、アタッチメントの実証研究における代表的な既存の測定(SSP; 観察、AAI; 面接、質問紙)を概観したうえで、開発途上である投影的手法について検討した。投影的手法は、AAIより簡便に、個人的な体験に触れずに、アタッチメント表象やIWMの情報処理過程(防衛のあり様)を測り得るものとして期待されている。海外では、子どもを対象に分離不安テスト(SAT)を用いた測定が試みられたり、大人を対象にアダルト・アタッチメント・プロジェクトブ(AAP)が開発されたりしており、これらの刺激画や分類基準を詳しく紹介した。筆者が開発した親子状況ピクチャー(PARS)についても紹介し、投影的手法によるアタッチメント測定の有効性を述べた。刺激画の刺激価値についての吟味、投影法特有の反応特徴についての検討、対象年齢を拡大しての分析基準の標準化、より広い実用性に向けて簡便な分析方法の工夫、といった観点から今後の課題を考察した。

キーワード: アタッチメント、内的ワーキングモデル、分離不安テスト(SAT)、アダルト・アタッチメント・プロジェクトブ(AAP)、親子状況ピクチャー(PARS)

1. はじめに

自他の関わり合いにおける情緒的な情報の受け止め方には個人差があり、著しい偏りは対人不適応とも関連する。こうした情報の受け止め方には、個々人の内側にある情報処理の構えが関わっていると考えられる。誕生直後から繰り返されるアタッチメント対象との具体的・主観的な経験が内在化されて形成される「内的ワーキングモデル(Internal Working Models; IWM)」の考え方は、情緒的対人情報処理の具体的な個人差を理解するうえで有効な枠組みを与えてくれる(久保, 2003)。

個人に内在化されたアタッチメント体験とそれに基づく表象モデル(すなわちIWM)を捉えるためには測定方法の開発が重要な問題となる。アタ

ッチメント理論の実証研究は、測定方法の開発とともに進展してきたといえる。まず、アタッチメント行動を観察する手法であるストレンジ・シチュエーション法(新規場面法、Strange Situation Procedure; SSP)が開発されたことで、乳児を対象とする研究が活性化した。その後、対象年齢の拡大に伴い、行動から表象へと注目が移行した。幼児期・児童期以降を対象に、さまざまな測定法の工夫・開発がなされ、成人を対象に面接を行うアダルト・アタッチメント・インタビュー(成人愛着面接、Adult Attachment Interview; AAI)が成人アタッチメントの信頼性・妥当性のある測定手法として標準化された。一方、より簡便に施行できる質問紙を用いた測定方法も開発されているが、IWMの情報処理過程を測りきれしていないとの

問題が指摘されている。そして近年、これらの限界を補おうとして新たに開発途上にあるのが投影的手法である。

本稿では、まず、アタッチメントと表象モデルについての基本的な考え方を整理する。ついで、アタッチメントの代表的な測度を概観したうえで、投影的手法について詳しく述べる。最後に、投影的手法についての今後の期待と課題とを考察する。

2. アタッチメントと表象モデル

Bowlby (1969/1982) は、アタッチメントを、危機的な状況に備えて、特定の対象との近接を求め、またこれを維持しようとする個体の傾性であると定義している。危機あるいは潜在的危機という事態にアタッチメントシステムが活性化されるのであり、「保護と安全に基づく関係 (George & West, 1999)」がアタッチメントである。アタッチメントシステムには2つの特徴があり、1つは人間にとって標準的な要素であるということ(すべての人の発達に関係があり、生涯重要で活発であること)、もう1つはアタッチメントシステムによって組織化される行動には個人差があるということである (Crowell, Fraley, & Shaver, 1999)。

認知能力の発達に伴い、アタッチメント対象との近接は、物理的なレベルでなくても、表象的なレベルでも安心感が得られるようになる。また、表象能力の発達は、アタッチメントの個人差の形成・維持にも関わる。つまり、子どもはアタッチメント対象との間で繰り返される具体的なやりとりを通して、アタッチメント対象からどのような応答が期待できるかという確信(アタッチメント対象についての表象モデル)と、自分はアタッチメント対象から応えてもらえる存在なのかという確信(自己についての表象モデル)とを構築する。これらの表象に基づいて、眼前の状況への認知と

行動が導かれるとし、Bowlby (1973) は、このような個人特有の心的ルールを内的ワーキングモデル (IWM) と名づけた。特に、アタッチメント対象に接近を求めても安全感をもたらす応答が得られない場合には、「二次的方略 (secondary strategy; Main, 1990)」として、アタッチメントシステムによって本来引き出される行動の表出レベルを操作したり、同時に認知過程も操作したりするような防衛が働く。これをBowlby (1980) は「防衛的排除 (defensive exclusion)」と呼び、対人不適応に関わるものと考えた。そのまま処理すると不安や苦悩や痛みを招きかねない情緒的負荷がかかったアタッチメント情報を、防衛的排除によって、取り除いたり変容したりする。主に発達心理学の領域で進展した実証研究は、このような観点に基づき、表象レベルでの個人差を理解しようとしてきた (George & West, 1999)。

3. 個人差の測定方法

3-1. アタッチメント行動への注目

アタッチメントパターンの測定については、まず、Ainsworthによって「ストレンジ・シチュエーション法 (以下、SSP)」という構造化された実験室手法が開発されたことで、乳児期を対象とする実証研究が活性化した。SSPでは、実験室で、乳児が母親と分離される時(ストレス場面)、再会する時の行動パターンに注目しながら、親との関わりの中で乳児が安心感を得るために用いるストラテジーを分類する。アタッチメントパターンとしては、分離に際し、泣いたり混乱を示したりすることがほとんどない回避型 (Aタイプ)、母親のそばでは活発に探索し、分離に悲しみ、再会時には接近してなぐさめを求める安定型 (Bタイプ)、接近しながらも悲しみや不安がなかなかおさまらないアンビバレント型 (Cタイプ)、さらに、いずれにも分類不能で、凍結や常同運動など

の混乱した行動を示す無秩序・無方向型（Dタイプ）とがある。生後1年間の母子相互作用の質と、1歳時点でのアタッチメント行動パターンとの有意な関連が認められており（Ainsworth, 1982）、乳児がすでに自他の表象モデルを形成しており、それに基づいてアタッチメント行動が導かれるためであると Grossmann & Grossmann（1990）は述べている。ただし、乳児期の研究におけるIWMとは、あくまで行動から推定される限りのものであり、観察される乳児の行動の個人差は、母子の外的な相互作用スタイルの差異によるのか、乳児の内在化した表象モデルの差異によるのかは結論できないとの指摘もある（遠藤, 1992）。

3-2. 行動から表象へ

乳幼児期以降へと研究対象年齢が拡大すると、外的なアタッチメント行動のパターンに依存したSSPに限界が生じ（Main & Cassidy, 1988）、アタッチメント関係の内在化された側面、表象レベルからの検討が試みられ始めた。

例えば、Main, Kaplan, & Cassidy（1985）は、6歳児の行動レベルのアタッチメントと、分離不安インタビューや家族写真への反応に表われる表象レベルでのアタッチメントとの関連、さらに乳児期に施行したSSPによるアタッチメント行動パターンとの関連を調べる縦断的研究を行い、これらが互いに有意に関連するという結果を得た。乳児期の行動の組織化と、幼児期の行動と会話の組織化とに、時間的にも表現の様式を超えても持続性が認められ、こうした作用を説明するメカニズムとしてIWM仮説が支持された。同時に、6歳児におけるアタッチメント行動は極めて多様化しているため、行動面からアタッチメントを捉えることの限界も報告されており、Mainは年長者のアタッチメントパターンを検討するためには表象への注目が有効であると考えた。

3-3. アダルト・アタッチメント・インタビューの開発と成果

Main et al（1985）は、成人のアタッチメント表象を「語り（Narrative）」によって測定する半構造化された面接法、「アダルト・アタッチメント・インタビュー（以下、AAI）」（Main & Goldwyn, 1984）を発表した。成人がアタッチメントに関する言語、思考、記憶を組織化する個人差は、乳児がSSPでアタッチメント行動を組織化するパターンと対応するとの仮定のもと、幼児期における父母との愛着関係の記憶、過去の愛着関係から現在の対人関係への影響、自分の愛着関係一般に対する態度などの想起を求め、その内容や内容の一貫性、あるいは面接に対する構えなどを把握することによって、成人のアタッチメント表象を、Ds.アタッチメント軽視型（dismissing）、F.自律型（autonomous）、E.とらわれ型（preoccupied）の3類型、場合によってはU.未解決型（unresolved）（Ainsworth & Eichberg, 1991）を含めて4類型（それぞれ順に、SSPにおける、回避型、安定型、アンビバレント型、無秩序型に対応する）に分類することを可能にした。特に、語られた内容そのものよりも、一貫した語り方をできること（coherence）が、アタッチメント安定性を識別するための重要な指標とされている。

AAIが開発されたことで、養育者のAAIとその子どものSSPとの関連を検討する世代間伝達研究（Ainsworth & Eichberg, 1991; Fonagy, Steele, & Steele, 1991など）、乳児期のSSPと成人になったのAAIとの連続性を検討する縦断研究（Waters, Merrick, Treboux, Crowell, & Albersheim, 2000; Hamilton, 2000; Weinfield, Sroufe, & Egeland, 2000）が進展した。

さらに、AAIによるアタッチメントと精神病理との関連も検討されており、精神科入院患者（精神病以外）には対照群より未解決型が有意に多い

こと (Fonagy, Leigh, Steele, Steele, Kennedy, Mattoon, Target, & Gerber, 1996)、ボーダーラインパーソナリティ障害には3分類でとられ型が、4分類で未解決型が多いこと (Fonagy et al., 1996; Patrick, Hobson, Castle, Howard, & Maughan, 1994) などが明らかになっている。こうした研究結果を受けて、Dozier, Stovall, & Albus (1999) は、IWMの防衛的な情報処理方略と精神病理との関連を次のように説明している。自身が感じる苦悩や養育者が有効でないという問題から防衛的に注意を逸らせる「最小化方略」が優勢であること (AAIの軽視型) と、不安や苦痛などの自己内部の問題が行動上の問題に置き換わって現れやすい「外向性次元の精神病理」(反社会性人格障害、摂食障害など) とが関連しやすい。また、自身が感じる苦悩や養育者が有効でないという問題に強い注意を向ける「最大化方略」が優勢であること (AAIのとられ型) と、不安や苦悩に圧倒される症状になりやすい「内向性次元の精神病理」(不安障害、境界性人格障害など) とが関連しやすい。さらに、アタッチメント対象の喪失や虐待などの心的外傷体験が未解決の心の状態 (AAIの未解決型) は、外傷性の精神障害である解離性障害や境界性人格障害などと関連する (詳しくは、北川, 2005)。

3-4. 質問紙を用いた研究

以上概観してきた実証研究は、主に発達心理学の領域で進展してきた流れである。社会人格心理学領域では、成人のアタッチメントを親密な他者との関係 (ロマンチックアタッチメント) から捉える質問紙が開発されてきた。

Hazan & Shaver (1987) は、乳児がSSPでとるアタッチメント行動パターン (安定、回避、アンビバレント) に対応させて、成人の一般的な対人態度についての記述文を作成し、もっとも当てはま

る記述文を選択させるアタッチメントスタイル質問紙を作成した。後に、この記述を多項目質問紙に再編する試みがなされ、 α 係数や再テストなどで有意な信頼性を得る精度の高い質問紙に改良がなされた (Collins & Read, 1990 など)。しかしながら、アタッチメントとは、本来、保護と安全に基づく関係であり、アタッチメントが深刻に脅かされること (すなわち保護の欠如) は精神病理のリスクとなるであろうが、性的要素や友好的要素を含むロマンティックな関係は、Bowlbyが定義したアタッチメント概念と同義ではないとの批判がある (Geroge & West, 1999)。

Bartholomew (1990) は、BowlbyのIWM定義に立ち返り、自己モデルと他者モデルがそれぞれ肯定的か否定的かという組み合わせで4つのカテゴリーに分類する質問紙を作成した。とりわけ、自己モデル・他者モデルともに否定的なカテゴリーであるFearful Avoidant (対人恐怖的回避型) と精神病理との関連が注目され、例えば、このタイプと全般的な人格障害とに関連を認めた研究がある (Brennan & Shaver, 1998)。しかしながら、質問紙への自己報告という手法では、アタッチメント情報を処理する際の無意識的な過程に接近できないという限界がある。SSPやAAIを用いた研究からは、アタッチメント情報を処理する際の防衛が組織化されておらず無秩序・無方向であること (Dタイプ) や、外傷的なアタッチメント体験が未解決であるために語りのモニタリングに失敗すること (U型) が精神病理の最大のリスクであることがわかっており、質問紙で測るアタッチメントの不安定型は防衛の混乱とは対応していないとの指摘がある (Geroge & West, 1999)。

4. 投影測度の開発と成果

4-1. 投影的手法への注目

質問紙は実施が簡便であり負担が少ないが、

IWMの情報処理過程に関する情報が得られないという限界がある。乳児期を対象に標準化されたSSPについては、年代に応じて適切なストレス場面を設定することで対象年齢を拡大してアタッチメント行動を観察する変形SSPが工夫されている(3,4歳対象Cassidy & Marvin, 1990; cited in Solomon & George, 1999、5,6歳対象Main & Cassidy, 1988)。しかしながら、成長に応じてアタッチメント関係についての思考や感情が複雑で重要になることや、実験場面での短い分離ではアタッチメントを活性化するほどのストレスとはなりにくいことから、年長者を対象とする場合には行動レベルより表象レベルを測定する手法が必要となってくる(McCarthy, 1998)。成人を対象に標準化されたAAIは豊かな情報価を得られるが、手法の習得(トレーニングへの参加と信頼性テストへの合格が必要)や実施の際の施行者・被面接者双方への負担が大きい(個人的な体験を扱う、面接におよそ1時間の所要時間、逐語録作成、1ケースの評定におよそ4～6時間所要)など、多くの労力を必要とする。

これらの測度の限界をふまえると、新たなアタッチメント測度として投影的手法の可能性が期待される。アタッチメントを活性化するような刺激には、内在化されたアタッチメントに基づくIWMが作用して情報処理がなされるのであり、実験室場面で行動を観察しても、投影刺激への表象反応を問うても、IWMの情報処理過程に迫ることができると考えられる。

筆者は、このような問題意識からアタッチメントの投影的研究を試みている(久保、2003; 北川・松浦、2003など)。以下に、まず、子どもを対象とした海外の投影的研究を概観する。ついで、成人を対象とした投影法として標準化が進行しているAdult Attachment Projectiveを紹介する。最後に、筆者の研究のこれまでの成果と今後の課題を

述べる。

4-2. 子どもを対象としたアタッチメントの投影的研究

幼児期以降、アタッチメントを表象から捉える試みは、人形を用いてアタッチメントに関わるストーリーの続きを演じさせるドール・プレイの手法(Bretherton, Ridgeway, & Cassidy, 1990)と、アタッチメントに関する絵や写真を見せて物語を問う絵画反応手続きとがある(Solomon & George, 1999)。ここでは、成人への適用可能性をもつ絵画反応手続きによる研究を概観する。

4-2-1. 分離不安テストへの物語作成反応とアタッチメントとの関連

Klagsbrun & Bowlby (1976) は、Hansburgの分離不安テスト(Separation Anxiety Test; SAT)を、アタッチメントを活性化する刺激として位置づけ、4~7歳向けの分離不安テスト(以下SAT)へと改作した。

Shouldice & Stevenson-Hinde (1992) は、4,5歳児を対象に、変形SSPによるアタッチメント行動と分離場面刺激画への反応との関連を検討し、IWMがいずれの反応の組織化にも関わっていることを検証した。刺激画としてKlagsbrun & Bowlby (1976)のSATを用い、分離の強度を修正し、強い分離と弱い分離とを交互に提示した(①両親が夜の外出に子どもを残して出発する場面、②初めて学校に行く日に母親と別れる場面、③両親が週末に出かけるため叔父・叔母宅に子どもを預けて別れる場面、④両親と公園に出かけ、母親が父親と話があるからしばらく離れて遊ぶように言う場面、⑤両親が2週間子どもを残して出かけるに際し、子どもにプレゼントをあげて別れを告げる場面、⑥子どもをベッドに寝かしつけて部屋の外に出ようとする場面)。被験者に、絵の状況を説明

し、登場人物を指し、分離場面であることを強調したうえで、絵の子どもの気持ち、その理由、絵の子どもはどう思うかを問うた。評定は、逐語録に基づいて、感情表現のオープンさや表現された感情の種類に関わる8指標（分離にふさわしい否定的感情、感情表現を回避する反応、肯定的な言葉による否定的感情の否定、強い分離場面でも否定的情緒の持続的否定、過剰な肯定的感情の表現、過剰な否定的感情の表現、自身の母親との分離不安の表れ、怒りの表出）とテストへの反応傾向に関わる4指標（反応の中断、体に関する反応、無力で受動的な展開、語りの非一貫性）についてなされた。これらの指標と、変形SSPによって分類されたアタッチメントのタイプとの関連を検討した結果は次の通りであった。アタッチメント安定型と有意に関連があったSATの指標は、分離に適切な否定的感情の高さ、否定的感情の持続的否定・過剰な肯定的感情の低さ、反応中断・非一貫性の低さであった。アタッチメント回避型と有意に関連があったSATの指標は、感情表現の回避反応の高さであった。アタッチメントアンビバレント型と有意に関連があったSATの指標は、怒りの強さと受動的展開の高さであった。アタッチメント無秩序型と有意に関連があったSATの指標は、非一貫性の高さであった。以上より、アタッチメント測度としてのSATの妥当性が示されたが、アタッチメントタイプの分類に用いるにはSSPほどの識別力はないと報告された。

4-2-2. 分離不安テストによるアタッチメントの分類

Kaplan (1987; cited in McCarthy, 1998) は、SATを用いてアタッチメントを分類するシステムを開発した。刺激画は6枚で、徐々にストレスの強い分離になる順に配列されている。刺激画が提示され、絵の中の子どもは分離の間何を考えたり

思ったりするか、どうしてそのように感じるのか、何をするであろうか、が尋ねられる。分類は、特定の刺激画への個々の反応に基づいてではなく、被験者がアタッチメントに関する情報を処理する際に思考・感情・行動を調整する全体的な様式に基づいてなされる。

Jacobsen, Edelstein, & Hofmann (1994) は、アタッチメントと認知能力の関連についての縦断的研究において、アイスランドの7歳児を対象に、Kaplanのシステムを用いて、SATによるアタッチメントの4分類を行った。分離場面刺激画として、Chandlerが視点取得能力査定のために開発した物語を用いた。刺激画は次の9枚からなる。①子どもが大人の側に描かれている場面、②大人が飛行機に乗る準備をしている場面、③手を振った場面、④飛行機の出発を見る場面、⑤子どもが家に帰る場面、⑥郵便配達員が子どもに小包を届ける場面、⑦子どもが小包を開ける場面、⑧中におもちゃの飛行機を見つける場面、⑨郵便配達員が覗くと子どもが泣いている場面である。それぞれの刺激画について、何が起きているか、主人公の考えや気持ち、そう思う理由、主人公がとる行動が問われる。安定型の特徴は、傷ついた気持ちについて自由に語り、その気持ちをアタッチメント人物に関連付けることができる（「お父さんが行ってしまったから寂しい」）、登場人物の気持ちを詳しく述べたり調節できる（「彼の気分はちょっとましだけど、まだ少し悲しい」）、語りに強い自己感がある（自分の気持ちと登場人物の気持ちを比較するなど）、分離への対処として建設的なアイデアを提供できる（「外に出てブランコに乗る」）、親と接触する自発的な解決を与える（「お母さんに電話をかける」）、など、子どもの対処能力やアタッチメントの必要性が直接表現されている。回避型の特徴は、アタッチメントに関する解釈をしない（「女性が旅立つのを女の子が見ている」）、絵の子どもの傷

つきを表現するが分離とは関連付けない(「お腹がすいているから悲しい」)、怒りの感情の認識や建設的な取り組みを想像しにくい(「ただ座っている」)、分離であることを認めなかったり、分離しても何も変わらないと主張したりする、などである。アンビバレント型の特徴は、怒りに満ちた主人公の気持ちを代弁する(「何もかも壊してしまう」)、アタッチメント人物を責めたり、子どもの行動に矛盾や両価性があったりする(「ずっとお父さんの側にいるけど、お父さんに意地悪をして逃げ出す」)、などである。無秩序型の特徴は、危険が生じる恐れを強調する(「飛行機が火事になってお父さんが死ぬかもと考えている」)、アタッチメント人物への接近が困難である(「迷子になっている間に家中の鍵がかけられて中に入れなくなる」)、刺激画が提示されると混乱を示し黙ったり絵を押し返したりする、反応がささやき声であったり極めて矛盾した反応になる(「全然平気、よくない」)、などである。

McCarthy (1998)はKlagsbrun & Bowlby (1976)の刺激画を、Shouldice & Stevenson-Hinde (1992)にならってストレスの強弱交互の順に提示し、ストレスの強い刺激画3枚のみの反応に基づいて、KaplanとJacobsen et al. (1994)の手法で分析・分類している。子どもが検査場面でみせた非言語的な反応も分類への手がかりとして加える修正がなされた。例えば、くつろいだ態度は安定型、刺激画から目をそらす行動は回避型、顔を手で覆ったり歪めたりといった奇妙な行動は無秩序型の特徴とされた。

以上の通り、用いる刺激画の種類・提示順序・分析に用いる刺激画の選択、分析の指標・基準などは各研究で工夫や改良の途上であるものの、投影的手法で測定できるアタッチメント表象タイプの特徴は、乳児がSSPで示すアタッチメント行動の特徴と対応することが、一連の研究で明らかに

なっている。

4-3. Adult Attachment Projective (AAP)について

AAPはAAI同様、施行にはトレーニングを受けて評定の信頼性テストに合格することを必要とするため、マニュアル (George, West, & Pettem, 1997; cited in George, West, & Pettem, 1999)は公開されていない。開発者自身が公開している論文 (West & Sheldon-Keller, 1994; George et al., 1999; George & West, 2001; George & West, 2003)に基づいて、AAPの概要を概観する。

4-3-1. 開発過程

彼らは、AAIのトレーニングを受け、AAIにおいて安定性の指標となる語りの一貫性を重要視しながら、より簡便に施行できる測度を求めて、投影的手法の開発に関心を向けた。開発の初期段階で、West & Sheldon-Keller (1994)はAAPを次のように紹介している。「アタッチメントに関する一連の絵を用いて青少年の分離不安を検討したHansburgの先行研究を参考にして、アタッチメントに関する刺激画からの物語作成を求める方法を採用した。これと、MainによるAAIの指標(特に語りの一貫性という指標)、TATやロールシャッハの分析法を統合し、語られた反応の“内容 (content)”と“様式 (style)”に注目する分析を試みる。刺激画への反応、解釈、説明は、個人特有のアタッチメントのIWMに従ってなされると仮定した。現時点では、刺激画は3枚(窓辺の子ども／ベッドタイムシーン／救急車シーン)であり、評定カテゴリーは次の5つである。すなわち、内容に注目したものとして；①アタッチメント文脈の有無、②養育者の応答性、③内在化された安全基地(大人が描かれていない刺激画のみから評定)、様式に注目したものとして；④反応の一貫性、⑤喪の未

解決（救急車シーンでの一貫性が他のシーンより明らかに低いなど）である。これらをふまえてのアタッチメントパターン分類は、探索的な段階である。（以上、West & Sheldon-Keller, 1994, Pp. 114-117を要約）」

その後刺激画は8枚に標準化された。刺激画の作成過程を、Geroge et al (1999)は次のように述べている。「グラフィックデザイナーの協力を得て、子ども文学、心理学教科書、写真集といった様々な出展から刺激画集を作成した。刺激画は出来事を特定するのに必要最小限の細部を描いた。性別や人種のバイアスがかからないよう注意深く描いた。刺激画からは、アタッチメントに関する3つの次元を捉えられるよう計画された。1つ目は、アタッチメントの活性化である。刺激画集には、病気、分離、孤独、死、脅威といった、アタッチメントを活性化することがわかっている出来事を含めた。さらに、徐々にアタッチメントシステムの活性化が増すと考えられる順序に刺激画を提示した。2つ目は、関係の利用可能性である。Bowlbyは、恐怖の最大の源は一人になることであると述べているため、刺激画集には、人物が一人の絵と二人の絵とを描いた。3つ目は、年齢である。Bowlbyによるとアタッチメントは生涯重要であるため、刺激画集には子どもと大人のアタッチメント状況の両方を描いた。（以上、George et al., 1999, Pp.323-324を要約）」

4-3-2. 刺激画

これらの手続きを経て選定された8枚の絵は次の通りである（Geroge & West, 2003）。まず、最初の1枚は中立場面（2人の子どもがボール遊び）であり、ウォームアップ課題として使用される。アタッチメント場面は次の7枚である。①窓辺の子ども（少女が窓の外を見ている）②出発（スーツケースを持った大人の男女が向かい合って立っ

ている）③ベンチ（若者が一人ベンチに座っている）④ベッド（子どものベッドの両端に子どもと女性が向かい合って座っている）⑤救急車（担架が救急車に運び込まれるのを、年上の女性と子どもが見ている）⑥墓（男性が墓の側に立っている）⑦角の子ども（子どもが片腕を突き出して、部屋の角に斜めに立っている）。評価はこれら7枚への反応に基づいてなされる。

4-3-3. 実施

投影法と面接法の手法をあわせた半構造化された面接形式で行う。面接者は、被面接者に、AAP刺激画で何が起きているかを尋ねることから始める。必要に応じて追加の質問をし、その出来事が起こった経緯、登場人物の考えや思い、話の続きについての情報を得る（George & West, 2003）。

4-3-4. 評価

評価は7枚のアタッチメント場面への物語反応の逐語録に基づいてなされる。AAPの分類システム開発にあたって、MainらのAAI、Solomonらのアタッチメント人形劇課題、George & Solomonの養育者インタビューから、一貫性や防衛過程についての考えが参考にされた。さらに、AAPにおいては、アタッチメント理論から概念的に導かれた新たな指標も追加された。その結果、「防衛過程（defensive process）」「語り（discourse）」「物語の内容（content）」の3次元から評価するAAPの分類システムが開発された。各次元の具体的な尺度は次のとおりである。

（1）防衛過程

非活性化（Deactivation）…アタッチメントの重要性や影響を軽減、軽視、低評価、最小化している。回避型の特徴。

（例：個人的苦悩というテーマを避け、ステレオタイプな社会的役割、物質的、権威的、達成志向

的な関係ややりとりを強調する。権威やルールに従わなかったなど、人物が否定的に評価される。) 認知的断絶 (Cognitive Disconnection) …アタッチメント 情報が分断し、苦痛な情報や感情と、その源とが断絶している。対極的なイメージの間を視点が揺れて定まらない。とらわれ型の特徴。

(例: 物語構成を決められない。出来事が不確かで両価的。考えを完成できない。2つの正反対のテーマを展開させる。)

分離システム (Segregated System) …アタッチメントの外傷経験をした者がとる最も極端な防衛的排除。外傷的な題材が、最も強い防衛的排除によって意識から締め出される(分離される)。通常は機能している防衛が、アタッチメントシステムへの強いストレスに関連して崩壊し、無秩序な行動や完全な遮断が生じる。＜分離システムが存在すること＞と＜それが未解決であること＞の両方を満たすと未解決型。

(例: ＜分離システムの指標＞危険な出来事、無力・統制不能・孤立。解離、不気味、魔術的な想像。語り手個人の外傷体験が物語りに侵入。

＜解決の指標＞内省して出来事を理解したり、自分を守るための行動をとったりができる。アタッチメント人物から身体的慰めや安心感を得る。これらの行動がなく、状況が改善されないと＜未解決＞。あるいは、物語作成不能や拒否に陥ることも＜未解決＞。)

(2) 語り

一貫性 (Coherency): 物語全体の組織化と統合の程度。

個人的経験 (Personal Experience): 自身の個人的経験への言及が反応に含まれる。

(3) 内容

自己の力 (Agency of Self) …この尺度は、登場人物一人の刺激画に基づいて評定する。登場人物に行動能力があって機能している程度であり、次の

3つの下位尺度からなる。

「内在化された安全基地」: 安全感を得るために内的資源を利用できる。一人の機会に自己内省に取り組むと同時に一人に満足している。

「安全な避難所」: 安全感が脅かされた時、アタッチメント人物に避難し、安定化を得る。

「行動能力」: アタッチメントの完全な安定化が得られなくても、変化を起こす行動に従事する。

つながり (Connectedness) …この尺度は、①窓辺の子ども、③ベンチの刺激画に基づいて評定する。誰かと関わりたい欲求が表れている程度。

同調性 (Synchrony) …この尺度は、二人場面の刺激画に基づいて評定する。応答的で相互的なやりとりがなされている程度。(以上、George & West, 2001; George & West, 2003より要約。なお、未解決型の指標である分離システムについては、George et al.,1999に詳しい。)

4-3-5. 分類

7枚の刺激画への評定に基づき、次のフローチャート図式に従って分類する。まず、1枚でも未解決の分離システムがあれば未解決型となる。未解決型に当てはまらない場合(分離システムが1枚もない場合、あるいは、あったとしても解決されている場合)、一貫性・自己の力・つながり・同調性の尺度が高く評定されていると安定型となる。これらに当てはまらない場合、非活性化の指標が3枚以上あれば軽視型となる。これに当てはまらない場合、認知的断絶の指標が3枚以上あればとらわれ型となる(George & West, 2001)。

4-3-6. AAPの妥当性

Georgeらはまず、地域被験者群(新聞広告で募った男女13名)に基づいて、分類枠組みの開発を行った。被験者13名すべてにAAPを、9名にAAI

を施行し、AAIによるアタッチメントタイプに基づいて、AAPの予測的分類基準を作成した。つぎに、AAP分類基準の妥当性・信頼性検証を、3 被験者群（ハイリスク乳児の母親、うつの女性、臨床群を含む）からなる75名に基づいて行った。AAIとAAPとを、別の評定者がそれぞれブラインドで分析した。AAPについては、複数の評定者間での分類結果の一致率は有意に高く（安定vs.不安定の評定者間信頼性は.86, kappa=.73, $p<.000$ ；4 分類の評定者間信頼性は.86, kappa=.79, $p<.000$ ）、AAIとAAPの分類結果の一致率も有意に高かった（安定vs.不安定の一致率は.92, kappa=.75, $p=.000$ ；4 分類の一致率は.85, kappa=.84, $p=.000$ ）。

AAIには4 分類より細かい下位分類があるが、実際の研究では4 分類について議論されることがほとんどである。AAPは4 分類のみを扱っており、AAIとAAPの分類結果に高い一致率が認められたことから、より負担の少ない手法としてAAPの有効性が注目されるとGeorge & West（2001）は述べている。

4-4. 筆者の研究

筆者は、1999年テキサスでのトレーニングに参加し、信頼性テストを受けて2001年にAAIの正式コーダー（3 分類）の資格を得た。AAIはアタッチメント情報を処理する際の心の状態や防衛を知ろうと非常に有効な手法と考えている。一方、4-1.で述べたように、実際の測定上の負担は大きく、AAIの分析基準を応用した投影手法の開発に関心をもっている。そこで、自身のアタッチメント体験に直接焦点化せずに、アタッチメント情緒を自ずと活性化するような間接的な刺激への反応を通して、IWMによる「対人情報処理の体験過程」に接近する投影的手法の開発を試みた（久保、2000）。まず、内在化されたアタッチメント体験が活性化されると仮定される日常的でストレスフ

ルな親子場面刺激画を作成し、親子状況ピクチャー（Picture Attachment Related Study、以下PARS）と名づけた。8 枚の刺激画への自由な物語作成反応と、過去の親子体験の想起を求める質問紙についての分析結果（AAIにならって、思い出への接近容易性や主体的統合度に注目し、回避型・情緒希薄型・とらわれ型・自己体験型に分類）との関連を、大学生を対象として検討した。その結果、投影課題であるPARSにおいて、親は子に応答し、関係の中でストレスは解決されるという信頼感の高い反応を特徴とすることと、自身の両親との関係について、良い思い出も嫌な思い出も想起し、自分の気持ちも親の気持ちも洞察し、主体的に統合した記憶として記述できる自己体験型との有意な関連が示された。逆に、PARSにおいて、親の応答性やストレス解決の見通しについての信頼感の低い反応を特徴とすることは、自身の両親との関係について、過去の親の行動に強い怒りや執着を示すとらわれ型と有意に関連することが示された。また、PARSにおいて、分離状況を不自然に避けた場面解釈をするなどの非典型的な状況反応をすることと、自身の母親との思い出を想起できないといった回避型との関連が認められた。以上より、投影法への反応特徴と親子関係想起様式との有意な関連が認められ、情緒的対人情報処理の個人差にはアタッチメントに基づくIWMが関わると仮定する妥当性と、IWM測定法としての投影法の有効性が示された。

また、刺激画への物語作成を求める手法は、対象年代を拡大しての施行が可能ではないかと考え、松浦・久保（1999）、久保・松浦（2000）は、小4、小6、中2、保護者を対象にPARSを行い、年齢ごとに標準的なPARSの反応を整理し、分析基準の標準化を試みた。その結果、標準的な反応パターンに年齢差が大きいことが認められ、こうした差異をふまえながら、PARSの結果と他の測

度による結果との関連を検討することが課題となった。まず小学6年生のみを対象に、他の測度との関連を検討したところ、PARSのいくつかの刺激画において関係性に肯定的な反応をすること、自身の親子関係を肯定的に自己報告すること、教師評定による肯定的な対人行動との関連が認められた(北川・松浦、2003)。

5. 今後の研究に向けて

アタッチメント 測度としての投影的手法は、AAIより少ない負担で実施でき、かつ、IWMの情報処理過程に迫りうるものであり、AAIの代替としての可能性をもつ。George & West(2001)は、防衛過程からアタッチメントの個人差を捉えたい時にはAAPが有効であり、下位分類、詳しい自伝的情報、アタッチメント 経験や心の状態を知りたい時はAAIを使い分けることを提案している。

開発途上の投影的手法について、今後取り組むべき課題をいくつか整理してみたい。

まず刺激画の刺激価値についての吟味が必要であろう。アタッチメントを活性化させるためにはストレス場面であることが重要である。SATでは分離の強度が段階的に強くなるように刺激画を配置したり、強い分離の刺激画のみを分析に用いたりしていた。AAPでは、一人場面と二人場面とを用意し、一人場面からは自己の力やつながりを求める程度を、二人場面からは同調性を評価した。PARSでは、ストレス場面5枚は段階的にストレスが高くなるよう配置され、あいまい度の高い刺激画をはさんで、分離場面(一人)、再会場面と構成されている。ストレスの種類や強さによって活性化されるアタッチメントの程度が異なるのか、場面の性質によって測りうるアタッチメントの特質が異なるのかといった、刺激画の刺激価値とそれに応じた分析方法についての検討が必要である。

分析については、既存の測定手法(SSPやAAI)と投影的手法との関連性についてのみでなく、相違点についても注目し、投影法特有の反応特徴を明らかにする必要がある。George & West(2001)は、AAPとAAIの4分類に有意な一致率を認めたものの、両測度に現れる各タイプの特徴が必ずしも類似していないと述べている。AAI、AAPいずれにおいても、安定型は自由でオープンで防衛に頼らないという類似した特徴を示したが、不安定型には次のような違いがあった。回避型は、最小化・防衛的非活性化方略、苦悩に動じない強さの強調という特徴では共通していたが、AAIでは理想化が特徴であったのに対し、AAPでは理想化はほとんどなく、苦悩が認識され、それが自他の否定的評価と結びついていた(例;悪いから罰をうけている)。とらわれ型は、視点の揺れや細部へのとらわれにおいては共通していたが、AAIで大きな特徴の一つであった強くとらわれた怒りが、AAPではあまりなく、怒りよりも受動的であることが特徴であった。未解決型は、AAIでは中度から軽度のモニタリングの失敗によって未解決とみなされるが、AAPでは分断された素材の小さな指標であっても未解決となる。こうしたAAPの特徴は、子どもを対象とした人形劇課題における各タイプの特徴と類似しており、自身のアタッチメント 来歴に焦点づけたときに現れやすい特徴(AAI)と、架空の物語場面に焦点づけたときに現れやすい特徴(投影法)との異同についての検討が必要である。

刺激画への物語作成課題は、子どもから大人まで適用が可能な手法であろう。年代によってアタッチメントを活性化するのに適切な刺激画に工夫が必要であるかの吟味や、年代ごとの分析基準の検討も課題である。George & West(2001)は、AAPと子どもへの人形劇課題との特徴が類似していたと報告する一方で、例えば、未解決の指標に

関して、子どもの物語にはAAPより恐怖、危険、保護の欠如が表現されやすいことを指摘している。PARSにおいても、子どもの反応には、大人にはなかったような、親の負担感、子どもへの教育的・しつけの解釈が多く認められた。年代による標準的な反応傾向を検討しながら、根底にあるアタッチメント表象やIWMを抽出する分析基準の標準化が望まれる。

測度の実用性に向けての課題としては、より簡便に信頼性のある分析ができるような方法を工夫する必要がある。そのためには、4 類型への分類のみではなく、反応の特徴をできるだけ詳細にとらえる指標の抽出が必要と考える。AAIやAAPの信頼性ある施行のためには、アタッチメントタイプの概念的違いをよく理解し、実際の反応に現れた多様で微細な特徴を、どのタイプにどの程度関わる特徴であるか適切に判断できる評定者の力量が必要になる。それを可能にするために、AAIやAAPではトレーニングや信頼性テストが必須となるのだが、実際に日本の研究環境を考えると、多くの研究者にとっては到達しにくい手法となり、その結果、質問紙を用いることでIWMの情報処理結果のみを測定したり、表象を扱う独自の工夫をしても分析も手探りであったりという問題が生じていることを懸念する。投影法という自由度が高い手法で得られた反応について、内容と反応様式に関わる精密で客観的な評定指標を抽出し、これらの指標が4 類型とどのように関連・対応するかを検証していくことで、より多くの研究者や実践家が利用できる測度になるのではないかと考えている。また、こうした課題を面接法で行う場合（SAT、AAP）と自己記入式質問紙（PARS）で行う場合とで得られる情報価の相違についても検討が課題である。

引用文献

- Ainsworth,M.D.S. 1982 Attachment: Retrospect and prospect. In C.M.Parkes & J.Stevenson-Hinde(Eds.), *The Place of Attachment in Human Behavior*. New York Basic. Pp.3-30.
- Ainsworth,M.D.S.,& Eichberg,C.G. 1991 Effects on infant-mother attachment of mother's unresolved loss of an attachment or other traumatic experience. In C.M.Parkes, J.Stevenson-Hinde, & P.Marris(Eds.), *Attachment across the life Cycle*. New York:Routledge. Pp.160-183.
- Bartholomew,K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bowlby,J. 1969/1982 Attachment and Loss: Vol.1. Attachment. New York: Basic.
- Bowlby,J. 1973 Attachment and Loss: Vol.2. Separation. New York: Basic.
- Bowlby,J. 1980 Attachment and Loss: Vol.3. Loss, Sadness, and Depression. New York: Basic.
- Brennan,K.A., & Shaver,P.R. 1998 Attachment styles and personality disorders: Their connections to each other and to parental divorce, parental death, and perceptions of parental caregiving. *Journal of Personality*, 66, 835-878.
- Bretherton,I., Ridgeway,D., & Cassidy,J. 1990 Assessing internal working models of the attachment relationship: An attachment story completion task for 3-year-olds. In M.T.Greenberg, D.Cecchetti,& E.M.Cummings(Eds.), *Attachment in the preschool years*. Chicago: University of Chicago Press. Pp.273-308.
- Cassidy,J., & Marvin,R.S. 1990 Attachment Organization in Preschool Children: Coding Guidelines. Seattle: MacArthur Workig Group on Attachment.(cited in Solomon & George,1999)
- Collins,N.L., & Read,S.J. 1990 Adult Attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 644-663.
- Crowell,J.A., Fraley,R.C., & Shaver,P.R. 1999 Measurement of Individual Differences in Adolescent and Adult Attachment. In J.Cassidy & P.R.Shaver(Eds.),

- Handbook of Attachment*. New York: Guilford Press. Pp.434-465.
- Dozier, M., Stovall, K.C., & Albus, K.E. 1999 Attachment and Psychopathology in Adulthood. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment*. New York: Guilford. Pp.469-496.
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象—愛着研究の最近の動向：ワーキングモデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観— *心理学評論*, 35, 201-233.
- Fonagy, P., Leigh, T., Steele, M., Steele, H., Kennedy, R., Mattoon, G., Target, M., & Gerber, A. 1996 The relation of attachment status, psychiatric classification, and response to psychotherapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 22-31.
- Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. 1991 Maternal representations of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62, 891-905.
- George, C., West, M., & Pettem, O. 1997 *The Adult Attachment Projective*. Unpublished attachment measure and coding manual, Mills College, Oakland, CA. (cited in George & West, 1999)
- George, C., & West, M. 1999 Developmental vs. social personality models of adult attachment and mental ill health. *British Journal of Medical Psychology*, 72, 285-303.
- George, C., West, M., & Pettem, O. 1999 The Adult Attachment Projective: Disorganization of adult attachment at the level of representation. In Solomon, J., & George, C. (Eds.), *Attachment disorganization*. New York: Guilford Press. Pp.462-507.
- George, C., & West, M. 2001 The development and preliminary validation of a new measure of adult attachment: the Adult Attachment Projective. *Attachment and Human Development*, 3, 30-61.
- George, C., & West, M. 2003 The Adult Attachment Projective: Measuring individual differences in attachment security using projective methodology. In Hilsenroth, M.J. (Ed.). *Comprehensive Handbook of Psychological Assessment: Vol.2. Personality Assessment*. M. Hersen (Editor-in-Chief of volume series) New York: John Wiley & Sons.
- Grossmann, K.E., & Grossmann, K. 1990 The wider concept of attachment in cross-cultural research. *Human Development*, 33, 31-47.
- Hamilton, C.E. 2000 Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, 71, 690-694.
- Hazan, C., & Shaver, P.R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Jacobsen, T., Edelstein, W., & Hofmann, V. 1994 A longitudinal study of the relationship between representations of attachment in childhood and cognitive functioning in childhood and adolescence. *Developmental Psychology*, 30, 112-124.
- Kaplan, N. 1987 Individual differences in 6-year-olds thoughts about separation: Predicted from attachment to mother at age 1. Unpublished doctoral dissertation, Department of Psychology, University of California, Berkeley. (cited in McCarthy, 1998)
- 北川恵 2005 アタッチメントと病理・障害 数井みゆき・遠藤利彦 編) アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房 pp.245-275.
- 北川恵・松浦ひろみ 2003 児童期後期における愛着表象の投影的研究～親子関係質問紙の自己評定結果ならびに対人行動の教師評定結果との関連～ 日本発達心理学会 第14回大会発表論文集 p.128
- Klagsbrun, M., & Bowlby, J. 1976 Responses to separation from parents: A clinical test for young children. *British Journal of Projective Psychology*, 21, 7-21.
- 久保(北川)恵 2000 愛着表象の投影法的研究—親子状況刺激画を用いて— *心理学研究*, 70(6), 477-484
- 久保(北川)恵 2003 情緒的対人情報処理と内的ワーキングモデル 風間書房
- 久保(北川)恵・松浦ひろみ 2000 児童期から前思春期にかけての愛着表象(2)～親子状況ピクチャー(PARS)による学年差の検討と親子間の比較～ 日本教育心理学会 第42回大会発表論文集 p.292
- Main, M. 1990 Cross-cultural studies of attachment organization: Recent studies, changing methodologies, and the

- concept of conditional strategies. *Human Development*, 33, 48-61.
- Main,M., & Cassidy,J. 1988 Categories of response to reunion with the parent at age 6: Predictable from infant attachment classifications and stable over a 1-month period. *Developmental Psychology*, 24, 415-426.
- Main,M.,& Goldwyn,R. 1984 Adult attachment scoring and classification system. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.
- Main,M., Kaplan,N.,& Cassidy,J. 1985 Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. In I.Bretherton & E.Waters(Eds.) Growing points of attachment theory and research. *Monographs for the Society for Research in Child Development*, Serial No.209, 50, 66-104.
- 松浦ひろみ・久保(北川) 恵 1999 児童期から前思春期にかけての愛着表象～親子状況ピクチャー(PARS) による分析手法開発の試み～ 日本教育心理学会 第41回大会発表論文集p. 734
- McCarthy,G. 1998 Attachment representations and representations of the self in relation to others: A study of preschool children in inner-city London. *British Journal of Medical Psychology*, 71, 57-72.
- Patrick,M., Hobson,R.P., Castle,D., Howard,R., & Maughan,B. 1994 Personality disorder and the mental representation of early social experience. *Development and Psychopathology*, 6, 375-388.
- Shouldice,A., & Stevenson-Hinde,J. 1992 Coping with security distress: The separation anxiety test and attachment classification at 4.5 years. *Journal of Child Psychology and Child Psychiatry*, 33, 331-348.
- Solomon,J., & George,C. 1999 The measurement of attachment security in infancy and childhood. In J.Cassidy & P.Shaver(Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical application*. New York: Guilford Press. Pp.287-316.
- Waters,E., Merrick,S., Treboux,D., Crowell,J., & Albersheim,L. 2000 Attachment security in infancy and early adulthood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, 71, 684-689.
- Weinfield,N.S., Sroufe,L.A., & Egeland,B. 2000 Attachment from infancy to early adulthood in a high-risk samples: Continuity, discontinuity, and their correlates. *Child Development*, 71, 695-702.
- West,M.L., & Sheldon-Keller,A.E. 1994 *Patterns of relating: An Adult Attachment Perspective*. New York: Guilford Press.